

I. 各工程の成果

2015年～2017年の3ヶ年に実施した調査は、①石材分布調査、②地形測量調査、③海中石材の三次元化処理である。

1. 素潜りによる分布把握

八人石丁場の海岸部には海中に多くの石材が分布する。海水面が澄んだ状態の時には水深2m近くまで海上から目視できる。分布調査は基本的にシュノーケリングで行い、確認できた矢穴石及び規格石材に目印としてナンバープレートを沈めた。シュノーケリングは段階的に実施し、1回目は広い範囲で石材を探すことに専念し、加工石材の可能性がある場合は素潜りで矢穴等の痕跡を確認した。2回目は目印の石材などを頼りに往復しながら面的に捜索を行い、石材にはナンバープレートを設置した。これらを頼りにおおよその位置関係を略図化し、個別石材を写真等で記録した。翌年は記録した石材の捜索を行い、確認できた石材については個別石材の計測を行った。海中の状況は、天候や時期などにより大きく変貌する。砂に埋もれて確認できないものや、海草によって判別できないものもあり、周辺の地形や海面より上に出ている石材などを手がかりとした確認が主な作業となった。

分布調査によると、南北の崖面近くには2mを越えるような自然種石の巨石が点在している。海岸から約20m付近までは崖面からの崩れや自然災害等による影響によると推定される1m前後の石材も多数確認された。その分布は鶴翼状に展開し、中央付近から南よりにかけては砂地がひろがっている。岸から離れるほど、石材は少なくなる。海中の加工石材は、17石を確認した沖合いでは水深5m前後に1石を確認するに留まった。

素潜りによる分布調査は、石材のおおよその分布を探る上では、有効的な手法と言える。本調査地では石材を確認できる水深は3～5m程度、石材の計測については2m前後までが限界であった。また、合わせてクリアカヤックによる海上からの石材確認も試みた。素潜りと異なり、周囲との位置関係を把握しやすいという利点があった。しかし、石材の確認には素潜りで接近する必要があり、併用することでより効率的な調査が可能であろう。



シュノーケリングによる石材確認



シュノーケリングによる石材確認2